

博士論文概要書

題目「日本における中国戯曲受容の基礎的研究―江戸期から明治期を中心に―」

申請者 伴 俊典

「日本における中国戯曲受容の基礎的研究―江戸期から明治期を中心に―」は日本の中国戯曲の初期的受容を解明するため、主に文献をめぐる受容に注目し研究を行った。特に江戸時代から明治時代にかけての中国戯曲受容史を、連続する一つの現象と位置づけその継承と発展の実態に注目し中国戯曲を解明することを主たる目的とする。その中で日本人の中国戯曲への取り組みの実態を明らかにするため、舶載、収蔵などに見られる書籍そのものの受容、校勘、注釈などに見られるテキストの理解と研究、翻訳に見られるテキスト理解からの日本文化への吸収といった書物を巡る様々な知的営為の諸点に視座を置き、実証的な書入れの解析を手段として日本人による中国戯曲の受容に考察を加え、白話小説の受容研究とは異なる、従来看過されてきた中国戯曲受容史に正面から取り組むことを目指した。

江戸時代以降、日本人が中国演劇の観劇や明清楽の演奏など様々な形で中国戯曲を受容してきた中で、中国戯曲に接触する最初には必ず中国戯曲の原テキストが関係している。しかし日本人が中国戯曲の原テキストを読解してきた歴史や読解する過程で様々な成果を創り出したことは今まで顧みられず、そこに含まれる深い洞察と詳細な解釈を含む高度な受容の実体はいまだ明らかにされていない。日本独自の方法で豊富な中国戯曲を蔵するに至った経緯や読解への取り組み、更にその継承や発展など、評価すべき成果は多岐にわたる。本論はこれらの課題をテキスト読解の面から検討し、日本人が独自の動機と手段によって中国戯曲文献と関わってきた歴史とその取り組みを明らかにし、従来の中国戯曲研究に若干の補足と訂正を提起し、歴史実態に即した新たな解釈を提示することを、根本的な意義とする。

本論は第一章「序論」において、本論で提起する問題を持つに至った経緯と先行研究、議論の範囲を述べた見解を述べ、第七章「総論」まで以下の内容を論じた。

第二章「江戸時代の中国戯曲書の所蔵と輸入」は江戸時代に日本にもたらされた中国戯曲文献を整理、分析し、この時代の日本人にとっての中国戯曲が、いかなる範囲で形成されたのかを、特に書物所蔵の過程とその経路のありかたから考察した。まず徳川一門の蔵書記録を探り、駿河御譲本の記録から中国戯曲書受容の上限を、御三家の蔵書記録から中国戯曲の分類が定まった経緯を、それぞれ探る。次に幕府蔵書、唐船持渡関連資料、大名蔵書資料、書肆流通関連資料を調査し、幕府蔵書、唐船持渡書関連記録の充実、大名蔵書、書肆の蔵書記録の資料不足の現状を把握する。幕府蔵書と唐船持渡書の記録をさらに調査し、唐船持渡書の輸入、管理、流通の各特長から、大名蔵書、書肆流通の中国戯曲書が唐船持渡書から窺えること、幕府蔵書と唐船持渡書の調査によって江戸時代の中国戯曲蔵書

の大概を推知することが可能であることを明らかにした。その結果、幕府と長崎は連携して漢籍収集を進め、漢籍を通じて得られる情報を精査していたことを突き止めた。その中で幕府所蔵の中国戯曲書は十七世紀までの日本の中国戯曲書受容を示し、唐船持渡関連資料に著録された中国戯曲書はそれ以降の日本の中国戯曲書受容を示すものと結論付けた。

第三章「江戸時代の中国戯曲解釈の特徴（一）——『諺解校注古本西廂記』『琵琶記』『蜃中楼』の書き入れの特徴——」は日本人による中国戯曲理解を中国戯曲テキストに加えられた日本人の記述から分析した。現在、中国戯曲書に日本人が書き入れを残した資料は遠山荷塘『諺解校注北西廂記』、無名氏『琵琶記』、無名氏『蜃中楼』、嵐翠子『蝴蝶夢』、無名氏『蜃中楼』、無名氏『水滸記』が見つかっていて、これらの書き入れを整理し共通する特徴と成立に係る問題を明らかにする。『諺解校注古本西廂記』から訓点と訓訳の特徴のほか訓訳成立に関わった人々の間に行われたテキスト貸借の関係を探り、『琵琶記』、『蜃中楼』、『蝴蝶夢』から訓点の特徴と多様な日本語化を探る。これらに共通する特徴はいずれも物語を日本語化する目的で、本文を訓点を主とした方法で解釈を試みている点にある。ただ『琵琶記』、『蝴蝶夢』、『蜃中楼』はいずれも抄訳であるうえに厳密な翻訳ではなく、日本人になじみのある様々な方法で改変が加えられており、こうした読解が中国戯曲の翻訳を主眼としたものではなく、日本人が物語を鑑賞するため日本語化することが目的であると推測した。

第四章「江戸時代の中国戯曲解釈の特徴（二）——『水滸記』全訳の成立——」は、『水滸記』訳本に残る書き入れの分析から江戸期の中国戯曲受容の過程を考察した。第三章で論じた中国戯曲書に書き入れを持つ資料は、書き入れの目的を推測させるが具体的に実証可能なものではなかった。しかし新たに発見した無名氏『水滸記』訳本は、第三章で論じた中国戯曲書の書き入れの特徴を全て備え、書き入れの目的を明らかに出来るほど整理され、全訳を備えたテキストであった。さらに稿本、定本、改訂本の三種のテキストが存し、テキストの書き入れの成立順序や詳しい編集の過程をも知ることが出来る特徴を持つ。『水滸記』訳本群を形成するこれらのテキストを調査し、最初に作られた稿本（山口本）は語彙の徹底的な抽出と確認し、本文に沿った訳語の推敲、白話部分の日本語訳、本文中の中国戯曲書中の術語の解説、一部の韻文（唱と賓白中の詩語）の検討が行われていたことを確認した。『水滸記』定本（関大本）、改訂本（演博本）は十五種の書き入れ書式が二十三種の用法に整理され、全訳を備えていたことを確認し、三種のテキスト成立を稿本（山口本）、定本（関大本）、改訂本（演博本）の順であることを明らかにする。この特徴を改訂本（演博本）から更に調査し、書き入れは本文に返点、送り仮名等の訓点が付され、稿本から拾い出した白話語彙は読解に必要な最低限の解釈を左訓、右訓、堅点等に整理し、中国演劇の術語、固有名詞等は初出の附近に一度だけ解説する形で本文上下、脇に配し、曲文は傍点、傍圈点、鉤括弧、圈点を使い検討を重ね、ト書き部分にある脚色は堅点を添えて配慮する、極めて周到かつ詳細なもので、目的に基づき完全に整理されていることを確認した。改訂本（演博本）の訳文は稿本（山口本）で検討された白話部分の訳文に加え、韻文の不足部分を補

い、更に稿本（山口本）で誤っていた部分を幾度も改めた全訳を本文脇に置く。そして改訂本（演博本）は細かな書入れ、傍訳を更に改め完成度を増したものである。これらの特徴を総合して、『水滸記』訳本に現れる全ての書入れは、訓読を手段として本文脇に示される日本語訳制作のために作成されたものであると結論付けた。

『水滸記』のこうした特徴は他の全ての中国戯曲テキストに加えられた書入れに共通するものである。また各テキストの書き入れが異なる体裁を持つのは、日本人における戯曲の受容が各々の目的に基づいて行われていたことを示し、『琵琶記』は文章の語法が分かればよく、『琵琶記』、『胡蝶夢』は「芝居」として楽しめればよく、『蜃中楼』は作者が「歌舞伎」に再構成できればよく、『水滸記』は中国戯曲を理解できればよかつたために、それぞれ異なる書入れと日本語訳が作られたのである。つまり江戸時代の中国戯曲書の受容は話柄を理解することを目的として、日本語訳を作成することが一般的な方法と言える。

第五章『水滸記』受容に見る明治期の戯曲研究』は明治期の『水滸記』をめぐる論述に見られる日本独自の中国戯曲受容の継承と断絶を検討した。『水滸記』訳本は明治期にも利用されていて、これを日本人の中国戯曲受容の継続性の一端を示す手がかりとして取り上げ、日中の『水滸記』をめぐる研究の比較、日本における新旧の『水滸記』研究の比較を通して日本独自の『水滸記』受容の特徴を明らかにした。

中国における一般的な『水滸記』研究史は明代の戯曲観劇の感想や作品の格付けなど上演に対するものから始まり、劇本の評価は『綴白裘』などの曲選、曲譜の類が広まる清代以降になる。そして民国以降演技、歌唱、テキスト、物語等様々な研究に発展する。各論考は或いは継承され、或いは批判、排除され、各研究が比較検討の上整理され、それらを踏まえた総論が形成され、その姿はさながら健康な樹木が十分な栄養を得て豊かに成長するように『水滸記』に対する価値観を形成する。

一方、明治期の日本における『水滸記』研究は一貫してテキストを解釈する形で進められ、幸田露伴、森槐南、千葉掬香、狩野直喜など様々な分野で活動する知識人が参加する。幸田、森の論考は小説『水滸伝』に対する興味から派生した水滸戯としての『水滸記』を論じたもので、主に『水滸伝』と比較する形を取る。千葉は『水滸記』を上演を含め総合芸術として紹介する。狩野は、森らと同様『水滸伝』と『水滸記』に関連する戯曲を取り上げその成立の問題を論じ、森らの説の誤りを実証により正す中で『水滸記』の成立にも触れる。狩野直喜が幸田、森の論考を優れた研究と評価する通り、これらの論考は研究として高い水準にある。また幸田、森、狩野の論考は『水滸記』訳本との関連はなく、千葉の論考は全体に『水滸記』訳本の書入れを下敷きにして作られる。明治期の『水滸記』に関する論述は江戸期の『水滸記』受容と関連するもの、関連しないものが見られるが、小説『水滸伝』の物語との内容の紹介、比較を一貫して主たる検討対象とするところに共通した特徴を持ち、この点、江戸から明治期にかけて『水滸記』に対する受容は共通した特徴を持つと言える。そして明治期の研究は各論が連携して『水滸記』受容を形成していった点も特徴に挙げられるが、昭和に入って発表された青木正児による研究は作家の紹介、

作品の紹介、属する調腔や地域など、『水滸記』を中国戯曲史中に位置づける文学史研究になり、中国の研究法に則って、江戸から幸田、森、千葉へと続く視点で『水滸記』に言及することは無い。江戸以来の異文化を受容するための伝統的な受容形態は、青木以降、研究において言及されることは無くなる。

こうした明治期の『水滸記』研究の継承と断絶はただ『水滸記』一作品に止まるものか全体に及ぶ特徴か、第六章「森槐南の戯曲研究と日本近世中国戯曲研究の成果」は明治期に中国戯曲受容に参加した人々及び中心的役割を果たした森槐南の中国戯曲研究を取り上げ考察した。

明治期の全体的な中国戯曲受容は漢詩の詠題として取り上げられたことに始まり、作品紹介、翻訳、文学史、講義録、テーマ研究へと発展する。その著者は漢詩人から作家、文学者、研究者を巻き込みすそ野を広げていくが、その具体的な広がりを整理すると『水滸記』研究において青木が継承することを拒否した形になった森槐南が、段階的に発展していく日本における中国戯曲研究の各局面で主導的立場を取り、その後続く人々の指針となっていたことが見えてくる。明治期における一般的な中国戯曲に関する論述が、一言で言えば中国戯曲文献史にとらわれがちであったのに対し、槐南の中国戯曲研究は詞の発生から曲が衰退するまでの「曲」の側面を重んじ、史料に裏付けされた実証を手段として戯曲の編成や舞台、音楽などを体系的に論じる戯曲自体の発展史に視座が置かれる点に特徴がある。彼の夭折によってその中国戯曲論が完成することはなかったが、その遺稿『詞曲概論』は上記の視点が貫かれた講義録であり、実証的、体系的に論じる劇論の視点は現在から見ても十分に中国戯曲の発展を捉え得たもので、中国における戯曲研究にも比肩し得る。例えば元曲の部分を王国維の『宋元戯曲史』の叙述と比べると引用資料、分析、論述、結論の各部分に共通した特徴を持ち、槐南の元雜劇に対する確かな方法と成果を見いだすことができる。

『詞曲概論』は元、清に豊富な引用と叙述を持ち、明の引用、叙述が少ない特徴を持つ。これは槐南自ら述べる通り検討する資料が不足したためであるが、『詞曲概論』の引用書と唐船持渡書等の江戸期の戯曲著録資料中の著録とを対照すると、各時代の蔵書の多寡が重なることが分かる。実証により支えられていた槐南の中国戯曲研究は、日本がそれまで蓄積してきた中国戯曲文献に支えられた成果であることが推測できる。槐南の中国戯曲研究は、中国の同時代における戯曲研究の成果を、日本にもたらされた文献から打ち立てることが可能だと示したもので、日本の中国戯曲受容の可能性を示すものと言える。

第七章「総論」は以上の考察を通して得た本論の結論を述べた。日本の中国戯曲の種々の受容の局面のうち、その端緒となる江戸時代の中国戯曲書の受容は十分に研究されてこなかった。その受容の経緯を検討し、駿河御讓本に端を発する江戸初期の主要な文庫には殆んど中国戯曲書が見られないこと、幕府蔵書が中国戯曲書のコレクションを構築したこと、唐船持渡書がそれに類する輸入書を記録したことを明らかにした。そのなかで、唐船持渡書の記録中の中国戯曲書に対する注記の変化は、十八世紀に至るまで、日本人が中国

戯曲書を様々なジャンルにひきつけ理解しようとしてきた試みを示すものだった。このことと尾張藩の蔵書記録中に見出した『琵琶記』の扱い方の変化に見られる、四部分類の導入による詞曲類の発見による分類の適正化が行われたことを合わせて考えると、中国戯曲書がまず既知の他書にひきつけて理解されながら次第に独自の地位を得、中国の規準に基づき整理された経緯が明らかになる。江戸時代開始以降、十八世紀末頃まで、こうした手探りの中国戯曲書の理解が進められた。また中国戯曲書に対する書入れの検討から幕府と長崎に見られた中国戯曲との関わり方の他に、日本人に中国戯曲が受容された活動があった事実が分かり、『諺解校注古本西廂記』に見られる民間、貴人、僧侶間の『西廂記』テキスト貸借があった点、『諺解校注古本西廂記』、『琵琶記』、『蜃中楼』（そして『胡蝶夢』）がいずれも十八世紀末から十九世紀にかけて作られた点、また『琵琶記』、『蜃中楼』（そして『胡蝶夢』）がいずれも日本の芸能にひきつけて日本語化を試みていた点は、十八世紀後半から幕末にかけて、民間において日本の芸能にひきつけて中国戯曲書を日本語化した受容状況を示すものと認められる。これは幕府による中国戯曲書の理解とは異なる中国戯曲受容の特徴であり、江戸期の中国戯曲受容は、十八世紀後半の四部分類導入を画期として前期を中国戯曲書の分類時期、後半を日本の芸能をフィルタとした日本語化時期と捉える。その具体的受容は中国戯曲の原テキスト理解の過程から明らかになる。それらの中で『水滸記』訳本の書入れに見られる書入れの成立過程と形式的特徴は、日本人による中国戯曲書書入れの特徴を最もよく示すものである。『水滸記』訳本の書入れは、日本語訳制作のために行われたものと認められ、江戸期の中国戯曲書に対する書き入れは日本語化を目的として、訓読をその手段として用いたものである。

そして明治期がもう受容における一つの特徴を示す時期となる。明治十年ごろ漢詩人たちが戯曲を詠題に漢詩を発表したことを皮切りに、様々な知識人たちが、各々の興味から紹介、解釈、翻訳、広義、史的整理を行いやがて各論を形成していった。明治期の中国戯曲受容は依然として江戸期の読解と日本語化の特徴を継承していたが、その受容は他にも詩詞の詠題、一般への紹介、教育機関での講義、中国戯曲史の編纂、各テーマ研究など多方面へ発展していった。この時期は中国戯曲の日本への啓蒙が広く行われた時期と認められる。それら明治期の中国戯曲をめぐる言説は、森槐南の中国戯曲研究が主導する。槐南の遺稿の分析から、中国戯曲を総合芸術と捉え、その各要素を史料による実証で構成する戯曲史を構想していたことも明らかとなった。また元代戯曲の叙述部分において引用資料、叙述の順序、結論など多くの特徴が王国維『宋元戯曲史』の当該箇所と一致することは、槐南の曲学が現代にも通用するものであったと認める材料となるだろう。一方、元雜劇と清传奇が充実し南曲に不足部分を持つ特徴は、槐南の蔵書及び読書圏を示すもので明治期に戯曲研究の状況もこれに準じる。そしてこの中国戯曲書の疎密は、江戸期以来の日本所蔵の中国戯曲書の傾向と一致するものだった。本論の検討は、江戸及び明治期における中国戯曲書の受容を、以上の三つの特徴にあらわされる段階を経て行われたものと認めたい。

本論の各章において中国戯曲書の受容の観点から検討してきた結果を総括すれば、江戸

期から明治期までの時期は中国戯曲受容の初期に当たり、その発展の段階は日本の種々の条件に影響を受けた日本語化を目的とする日本独自の受容形態をとる「独自受容期」と言うべきものだった。その異質な解釈の特徴はやがて中国の研究方法による中国戯曲研究から排除されるものの、中国戯曲を考究する研究として十分な価値と機能を持ち、単に日本の風土特徴の投影という水準を超えて、中国戯曲の価値を掴む研究に発展する可能性を十分に持つものだった。それぞれの研究や論著が内包する表現の方法的な領域を深く理解した上で、その存在意義を規定するべき性質を帯びていることは、いかに強調しても過ぎることとはなく、その上で、我々日本人研究者がこの問題の解決に取り組まなければならぬと強く感じるものである。日本的な「日本語化」の要求に従って、新たにもたらされた中国戯曲書の、当時の日本の「興味」の結果として収集せられた諸書が作り出した環境を十分に使用し得た中国戯曲研究こそが、日本の作り出した中国戯曲論の終着点であった。その意味で、日本の中国戯曲研究は中国の諸戯曲研究に比すべき対象になり得るもので、中国戯曲発展史に歴史的な意味を持つものである。